

上海く香港く台北 (その一)

成田 オーバーブッキングで三時間以上も待たされる

事故に遭うんじゃないか、具合が悪くなってぶっ倒れるじゃないか——出かけるとなると、体調を崩してからというものの、いつもこんな気持ちに襲われる。とくに海外へ出かけるとなるとひどい。迷惑をかけてしまう、悪いなあ、悪いなあ、本当に悪いなあ、こう思いながら、土壇場になってキャンセルしてしまうことが少なくない。「ドタキャン」の常習犯になっている。この間も約束しておきながら、平謝りして内蒙古と北京行きを直前に中止してしまった。

今回も上海・香港・台北行きを決めると、不吉なことばかりが次から次へと浮かんできて、それが頭にこびりついて離れない。相変わらず体調がいま一つのためだろう。出発の日が迫るに連れて、不安は確信に近いもの変わった。万が一に備えて、遺言代わりにメモは書いてあるし、日頃から身の回りの整理にも心がけているけれど、それにも手抜きがあるように思えて仕方がない。

今回の目的地の上海・香港・台北は、なんだかんだで行き損ねてきた所ばかりだ。前回、内蒙古と北京を味わい損ねたことも、今となっては口惜しい限りである。今度も中止すると、もう上海・香港・台北には一生行けないのではないかという不安に襲われた。この方が旅に出る不安よりも大きくなった。それで遺言代わりのメモを見直し、身の回りの整理もできる範囲でやり直した。体調を心配していても意味がない。所詮、なるようにしかならないのだから、今回はともかく出かけようと決意した。タイ・シンガポール・カンボジアと回ってきた時から、半年ぶりの東南アジアへの旅である。

だが、旅への不安はすぐに現実のものになってしまった。そもそも二時間を見込めば十分だろうと八時ごろに出たのが間違いの初めだった。高速道路の流れに乗り

切れない週一ドライバーが繰り出してくる日曜日だったからだ。成田に向かう湾岸道路には千葉北付近から渋滞中の標識がでていた。「何てことだ！」と、京葉道路経由に変えた。でも湾岸道路ほどでないが、やっぱり混んでいた。しかも狭い二車線でスピードを出しにくいときている。

出発は十時だから、この渋滞の中を一時間あまりで潜り抜け、空港に着かなければならない。「事故をやらかすかも知れない」と覚悟して、車線を右に左に変えて懸命に先を急いだ。息せき切って日本航空のカウンターの前に立ったのは出発の十分ほど前だった。小さな手荷物一つの身軽な姿である。欠かしたことのなかったパソコンも持っていない。「やったね」心の中で叫んだ。間に合ったと安心した。

食事券と差額をもらってちよつと得した気分？



ところがだ。ビジネスクラスなのにオーバーブックイングのため、もう席がないという。いったいどうなっているんだ。やっぱり今度の旅行は中止しておけば良かった。恨んで呪って心の中で舌打ちしたものの、いまさら中止もできない。

左隣のカウンターでは、予約は取ってあるし、少し遅いと言ってもキャンセル待ちの人を呼ぶ声もなかったのに席がなくて乗れないというのはどういうことだ、とキャリアアウーマン風の中年女性が日航の女性職員を相手に噛みついてる。もうヒステリックを通して

り越してエキセントリックになっていた。右隣のカウンターでは米国人らしいビジネスマンに男性職員が喧噪の中で馬鹿丁寧ばかていねいに理由を説明している。いつもキャンセル

ルがたくさんでるので大目に予約を受けたところ、今回はキャンセルがなく、それで席が足りなくなってしまった。迷惑をかけて申し訳ない。次に上海に行く午後一時四十分発の中国東方航空の席を確保したので、それで行って欲しい。こう説明して、「申し訳ない」を連発していた。

そんな話を聞きながら様子がだんだん飲み込めてきた。いろいろ言い訳しているが、本当のところは予約システムにトラブルがあったらしい。そんなことを考えていたところに、先ほどオーバーブッキングのため席がないと言った後、僕の切符を持って姿を消した女性職員が戻ってきた。そして再び申し訳なさそうに同じ説明を繰り返したのだけれど、様子が少し違っていた。心持ち小声で、中国東方航空に代わることに伴う差額を返す、昼食の食事券も出すという。だから、これにサインして欲しいと受領書を差し出した。



妙に思ったけれど、いくらやり合っても席がないのなら仕方ない。コックピット内の補助席に座らせろというウルトラCもあるかもしれないけれど、そこまですることはあるまい。上海で落ち合うことにしているのは寅さんだし、分かってくれるだろう。申し訳ないけれど、到着が遅れると連絡さえしてくれば良いだろう。寅さんとは、前も東南アジアを一緒に旅した、ある大手メーカーの幹部社員である。同年輩だし、数ヶ月だが僕が年上だし、長いつき合いで気心も知れている。甘えさせてもらうことにした。

何にもまして、ここに来るまでかなり疲れてしまったし、僕としては一刻も早く、この狂った喧噪けんそうから抜け出したかった。それで即決した。延々と続いている隣のやりとりを聞きながら、サッとサインして、チケットと食事券と現金の入った封筒を黙って受け取って内ポケットに収めた。

そして関西国際空港から日本航空で上海に向かう寅さんの本名と搭乗便名を書いた紙を手渡し、フライトが変わる旨を伝えてくれるように頼み、カウンターを取り囲む人の群から抜け出し、ちよつと離れた中国東方航空のカウンターに直行した。中国東方航空——まだ乗ったことのないエアラインである。「なんでまた、よりよって！」と不安が増す。でも諦める^{あきら}しかない。早々にチックインを済ませて、気休めに返してもらった差額を使って事故保険を限度一杯まで追加した。そして「これでよし！」と自分に言い聞かせた。

すると急に腹が減ってきた。朝飯を食べていなかったことに気がついた。出発まで三時間以上ある。もらった千五百円の食事券を目一杯に利用して、豪快で華麗なジャンボやエアバスの離着陸を楽しみながらのランチと洒落^{しゃれ}込んだ。気分は落ち着き、それになんだかすつかり得をしたような気持ちになった。

しかし、考えると本当に妙な話だった。あれだけ多くの人が、席がなくて乗りそこねるなんて信じられない。しかも別のエアラインに変えられたことは何度も経験したけれど、それで差額を貰ったことなど一度もなかった。寅さんに話したら「そりゃあ、絶対に、その筋の人に見られたんだよ」「ごちそうさまです。それで何か旨いものを食べましょう」とでも言うに違いない、と思わず苦笑した。

案の定、上海でしびれを切らして待っていた寅さんと合った時に、事の顛末^{てんまつ}を話したら、やっぱりそう言われた。(なお、戻ってきてから馴染^{なじ}みの旅行社から聞いたところ、やっぱり日本航空の予約システムのトラブルで、なんとまるまる二倍の予約を受けてしまったという前代未聞の出来事だったそうだ)

一番大きな原因は社会主義の文化が崩壊したこと

食事を済ませてビジネス客用の待合室に入った。そして僕の上海到着が遅れるという伝言が寅さんに伝わったかどうか確認を頼んだ。間もなく「間違いなく関西国

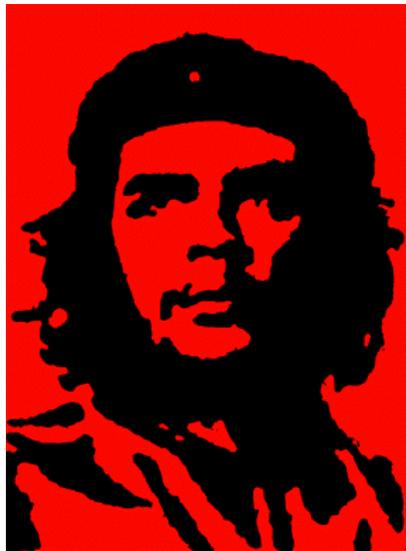
際空港で伝言をお伝えしました。その確認が取れました」と、喫煙席でくつろいでいる僕に知らせにきた。人騒がせだったけれど、これで、ともかく一安心である。出発まで時間はたっぷりある。まだ誰もいなかったので壁際の邪魔されにくい場所に陣取って、置いてある新聞や雑誌に片っ端から目を通すことにした。こんな贅沢な時間は普段はとても持てない。椅子は快適だし、コーヒーはお代わり自由で静かだし、言うことはない。

しばらくすると、カウンターのところで文句を言っていたスキンヘッドの米国人らしいビジネスマンも入ってきた。僕の右手前方十メートルぐらい離れた喫煙席に座り、テーブルの上に書類とノートパソコンを一杯に広げて仕事を始めた。ピンクと黒の縞模様の派手なシャツの大男がかがみ込んでパチパチと叩くキーボードの音が静かなサロンに軽快に響きだした。

続いて、服装は黒のニットスーツとベージュのロング・カーデガンと地味だけれど、ひときわ目立つ女性が入ってきた。僕の左側で怒鳴っていた女だった。スキンヘッドの男と僕の間のコナーの椅子に座った。タイト・スカートにくるまれた腰と、そこから延びる長いすらっとした足が眩しい。おもむろにバックを開け、シガレットケースを取り出し、煙草に火を付け、文庫本を読み始めた。視線を意識した仕草なのだろうけれど、ややきつめの顔と似合っている。エキセントリックな姿を見てしまったのを残念に思った。

成田空港にいることも忘れて新聞や雑誌の記事に没頭した。これから出かける東南アジア諸国に端を発する世界の株式市場や為替市場の混乱が大きく報じられている。日本の政治や経済の混乱に関する記事も多い。年功序列や丸抱えの福利厚生など、いわゆる日本が誇ってきた体系の崩壊が加速化し、社宅や住宅補助の廃止などサラリーマンの既得権を脅かす制度改革が本格化している——こんな内容の特集を日本経済新聞が載せていた。

日経が得意とする後追いの「煽り」というか「盛り上げ」である。分かり切ったことだけれど、大金持ちと貧乏人に二極分化し、中産階級が衰亡した米国社会を思い浮かべ、改めて日本も同じ道を辿ることになるのだろうかあんたんと暗澹たる気持ちになった。「平等」の意味を深く問いつめないまま「平等」な社会の実現という大儀まばゆを感じ、それに大きな期待を寄せて行動し、そして挫折した経験を持つ世代としては、こうした逆戻りの流れを見ると複雑でほろ苦い思いに駆られる。



今また若くして処刑された革命家ゲバラがブームで、ゲバラ・グッズが売れている。ベレー帽をかぶった髭面のゲバラの顔をプリントしたTシャツを若者たちが喜んで着ているという。ファッションに過ぎないと言いつける人たちがいるが、それだけでは説明し切れないものを感じる。

そう言えば小説家で評論家の堺屋太一は、元外務官僚で評論家の岡本行夫との対談で「東西陣営が崩壊したのはなぜか。一番大きな原因は軍事的なものでも政治的なものでもなくて、社会主義の文化の崩壊したこと」だと語っていた（「ニッポン再生最前線」岡本行夫 都市出版）。堺屋太一や岡本行夫をはじめ、僕らの世代にはなかなか重い言葉であろう。社会主義を事実上駆逐し、結果として対立軸を失ってしまった資本主義の将来はいつたくなるのだろうか。

福祉国家の見本とされたスウェーデンも行き詰まり、ソ連崩壊の時、ソ連は崩壊したけれど社会主義は日本で生きているなどとプラウダにや揶揄されたほどの修正資本主義を掲げてきた日本もご覧の有り様である。EUの実験も厳しい試練に直面している。繁栄を続けるアメリカでも内部歪みの圧力は高まる一方である。「資本主義の未来」（レスター・C・サロー TBSブリタニカ）、「進歩を超えて 相互主義論序説」（ヒュー・デイ・サントス 文藝春秋）、「新世界無秩序」（ピエール・ルーシュ NH

K出版)、「不機嫌な時代」(ピーター・タスカ 講談社)、「知の大潮流」(ネイサン・ガードルズ編 徳間書店)など百家争鳴である。ひやかさうめいちよつとやさつとでは、羅針盤をどうすれば良いのか決められそうもない。

蘇る伊能忠敬——五十歳からのわがまま人生

こんなもやもやとした気分を吹っ切ってくれたのは、伊能忠敬がいのうただたか一八〇〇年から一八一六年にかけ日本全国を実測して完成させた、縮尺三万六千分の一の「大日本沿海実測全図(伊能大図)」の模写の一部が発見されたという記事だった。伊能大図は二百四枚で構成されるが、火災で焼失し、数枚しか残っていなかった。ところが、そのうちの四十三枚の模写が氣象庁の図書館から発見されたという。各紙がかなりの紙面を割いて報じていた。



一九八九年の創刊以来の愛読雑誌「サライ」(小学館)の数年前の伊能忠敬特集いのうただたかを思い出した。「伊能忠敬流 五十歳からのわがまま人生」(一九九二年十一月十九日発行)というヤツである。なお、「サライ」とはペルシャ語で「宿」という意味だそうで、中高年を中心に根強い人気があり、創刊号からのバックナンバーなどを収録した「サライのさらい」というホームページまで作っている好事家こうずかもいる(<http://www.tokaido.co.jp/sarai/index.htm>)。

「伊能忠敬が江戸時代末に正確無比な日本地図を作成したのは、齢五十を超えてからのこと。夢断ち難く、家業を捨てて第二の人生を突っ走ったからこそその偉業であった。人生半ばを過ぎて、不要な我慢をすることはない。『わがまま』でいい。忠敬の自在な生き方を学んでみたい」、「一身にして二生を経る生き方に関心をもった」ということで、伊能忠敬を主人公に小説「四千万歩の男」を書き上げた井上いのうただたか

ひさしが、次の「小見出し」に分け、伊能忠敬を解剖していた。

- 歩 —— 行きたい道だけを歩き続ける
- 好悪 —— イヤな人間とは付き合わない
- 女 —— 歳を考えずに恋をする
- 食 —— おいしいものだけを食べる
- 地図 —— こだわれば結果は自然についてくる
- 道 —— 道楽のためなら金を惜しまない
- 先見 —— 時流を見極めて流行に乗る



伊能忠敬は十歳で、いまの千葉県佐原市の名主の伊能家に奉公人として引き取られ、十七歳で子持ちの未亡人だった四歳年上の伊能ミチの婿養子になる。名主時代にめきめきと才覚を現す。酒造りで成功を納め、さらに薪や炭まで商売

の幅を広げる。財テクにも長け、伊能家を佐原一の豪農にまで盛り立てる。忠敬との間に一男二女をもうけたあとミチは、忠敬三十九歳の時になくなる。その二年後から、名前は残ってはいないが、妾との間に、忠敬はさらに二男一女をもうける。さらに仙台藩医の娘ノブを正式の妻に迎える。数年後にこのノブを失った忠敬は、現在の金額にして数億円の資産を残して隠居し、江戸に出て学問を始める。実に忠敬五十歳の時だそうだ。

その江戸で学問を学ぶかたわら若い娘エイを妾にする。四人目の女性である。このエイという女性は不思議な女性で、学があり、書に長け、絵心もあった。エイがいなければ地図は完成しなかったろうという。忠敬が測量に連れていたのは妾の子の秀藏など内弟子の三人で、忠敬から送られてくる資料をもとにエイが指揮を取って「大図」や「中図」などを完成させたという。



ともかく五十歳で
隠居してから勉強を
始め、七十二歳ぐら
いまでの間に日本中
を十四回ぐらいかけ
まわり、約三万五千
キロメートルを踏破
し、とうは「大日本沿海実
測図」を完成させた

もの凄いエネルギーにはただただ感服してしまう。その私生活の発展ぶりにも目を
見張る。伊能忠敬に限らず、日本で言えば「養生訓」を著した貝原益軒、かいばらえっけん民族学を
うち立てた柳田国男、海外で言えばトロイ発掘を行ったシュリーマン、スエズ運河
を掘削したレセップス、画家のアンリ・ルソーなども似たり寄ったりで、人生を二
度生きた人々だという。

こんな話しを思い出して、妙に明るい気持ちになってきた。やはり「サライ」は
中高年にやる気を起こさせてくれる雑誌である。まだ僕だつてやれるチャンスが十
分にある——そう思ったら一刻も早く上海に旅立ちたくなった。旅への不安も陰を
ひそめた。「もう隠居だけれど、僕だつてもう一頑張りしてみるぞ！」針治療の効
果が出てきているようだ。体調もどん底から抜け出し始めている。

気を取り直して大きな伸びをしたところに、上海行き中国東方航空の搭乗を急
がせるアナウンスの声が耳に入ってきた。いよいよ出発である。(つづく)

一九九七年秋 伴 友貴